東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

2021年度 音楽科活動報告：創作活動の充実

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田,光一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173827

国際中等教育研究　第15号 p.153 ～ 155
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

2021 年度　音楽科活動報告

―創作活動の充実―

Initiatives of the Music Division for SY2021:

Enhancement of creative activities

音楽科　飯田 光一郎

１章　はじめに（要旨）

2021 年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響で歌唱活動の実施が難しい状況の中，器楽・鑑賞・創作の領域で年間指導計画を組み立てていくこととなった。昨今，音楽科の教育の中でも一層の充実が求められているのが創作である。探究的な学習が特徴である MYP のカリキュラムと関連して考えても，音楽における創作領域での学習は得られる効果が非常に高いと考える。今回は 2021 年度の音楽科の授業実践を，創作領域に焦点を当てて報告する。

２章　創作活動の充実（実践報告）

１節　中等１年生「場面を表す音楽」

本題材では，「ヴィヴァルディ作曲『四季』より『春』第１楽章」と「シューベルト作曲『魔王』」の２つの曲の鑑賞を通して，音楽の様々な要素が受け手に与える影響を考え，その後にグループで設定した３つの場面を表す音楽の創作を行った。１学年で取り組んだ IDU に関わる題材であるので，学習の展開や報告等の詳細は本誌の別稿を参照していただきたい。

２節　中等２年生「ボディ・パーカッション」

本題材では，既存の作品でボディ・パーカッションに慣れ親しんだ後に，グループ毎でオリジナル作品の創作に取り組んだ。既存の作品で取り上げたのが，3 パートに分かれるボディ・パーカッション曲である「One Week（滝口亮介：作曲）」である。手拍子，もも打ち，足踏みと３種類の奏法を組み合わせた作品であり，入門編として適した楽曲で，ボディ・パーカッション特有のスタイルや読譜方法を学ぶことができた。

その後，グループでは，既に音楽科が指定したリズムで奏法や音の重ね方を工夫する部分と，完全にオリジナルで創作する部分を混ぜ合わせた作品づくりに取り組んだ。曲全体のつながりを意識しながら，「ここが１番の盛り上がりだから細かなリズムで音を重ねて」や「ここはハッとさせたいからいきなり人数を減らしてギャップをつくろう」などとアイディアを交換しつつ作品が出来上がっていった。指定したリズムの部分でもジャンプなどの動作を取り入れるなど，オリジナリティが溢れる表現を追求しているグループも見受けられた。

３節　中等３年生「四季を表す音楽」

本題材では，「音楽で季節を感じるのは何故か」という問いからのスタートであった。１学年と同様に鑑賞と創作を組み合わせたユニットだが，鑑賞では歌唱曲，器楽曲，様々なジャンルの曲で季節との結びつきをリサーチしていった。歌唱曲で取り上げたのは，滝廉太郎作曲の「四季」である。

春の曲である「花」が有名だが,「納涼（夏)」「月（秋)」「雪（冬)」と全曲に触れることで音楽の諸要素とそれぞれの季節のイメージを結びつけていった。しかしながら，この段階では「歌詞によるイメージが強く，そこから季節感を感じているのでは？」という意見が多くあった。それを検証するべく，チャイコフスキー作曲の「四季」（ピアノ曲）や，ジャズやポップス曲でタイトルに季節が関係する曲を鑑賞した。複数の曲を聴く中で，それぞれの季節で用いられる音楽の傾向をつかみ出す生徒も表れてきた段階で創作の活動に移った。

創作ではピアノもしくはギターを用いて，自らがイメージする四季を表す 4 小節程度の単旋律の作曲を課題とした。まずは，季節を選択してテーマを設定し，そのテーマを表現するために必要な速度・使用するリズム・音域・旋律の流れなどの設計を行った。特に今回は旋律の流れを意識させて，段々と音高を上げていくのか，下げていくのか，山型なのか，谷型なのかを考えてから音の選択に進めたため，音の組み合わせに慣れていない生徒でも直感的に活動に入ることができていた。

4 小節程度の短い作品（駅の発着メロディや CM のアイキャッチのような雰囲気の作品）とだったが，鑑賞の学習から発見した要素等を用いて，発表会ではお互いが頷きながら季節をイメージして音楽を共有することができた。探究の問いについてのまとめでも，音楽と季節の結びつきについて考えが深まっている生徒が多く見られた。また，その中でそれぞれの季節の良さや美しさを再認識できている生徒もいた。

4 節　中等 4 年生「オリジナルソング創作」

本題材では,「芸術的創造のプロセスは，自己発見につながり得る」を探究の問いとし，旋律創作の基礎を学ぶ前半パートと，それぞれが作曲の手順を決めて創作する後半パートの 2 つから構成されているユニットである。

前半のパートでは，コードの構成音から旋律の核となる音を抽出し旋律の骨格をつくり，非和声音やリズムを工夫しながら旋律に近づけていくという方法をとった。理論に則った創作が初めての生徒にとっては, 手順を踏めば旋律が形づくられるため, 取り組みやすいという意見があった一方, 音楽経験の多い生徒からは制約が多く難しく感じたとの意見もあった。続く後半のパートでは，旋律・リズム・歌詞・コードのどの要素から取り組んでもよいこととし，旋律からイメージする歌詞をつける生徒や，歌詞からリズムを生み出し旋律をつくる生徒など様々であった。旋律とコードの組み合わせに関しては，知識が足りていない場面が多く進め方に課題が見られた。また，既存曲を例にリフレインの使用や，定番のコード進行，アウフタクトの扱い方などをレクチャーし，適宜自身の作品に反映させていった結果，まとまりのある作品が完成していった。

8 小節の旋律の創作だったが，それぞれが過去に親しんでいた曲を参考にしたり，自らの好むリズムや旋律を見つけ出したりするなど，改めて自分自身と音楽の関わりに気付くきっかけにもなる学習となった。

3 章　おわりに

創作活動は表現と鑑賞の双方の領域を常に行き来するものであり，音楽的な見方や考え方を広げることに大きくつながる学習だと考える。また，創作とは内面にあるものを表出しようとする極めて自発的な活動であるので，生徒が意欲的に学ぶ姿を多く見取ることができた。今回の実践を更に改善していって，次年度の実践へとつなげていきたい。

Initiatives of the Music Division for SY2021:

Enhancement of creative activities

Abstract

In 2021, because of the spread of the new coronavirus infection, it was difficult to conduct singing activities, so we decided to construct an annual teaching plan in the areas of instrumental music, appreciation, and creative writing. In recent years, creative writing has become an area of music education that requires further enrichment. In relation to the MYP curriculum, which is characterized by inquiry-based learning, we believe that learning in the area of creative writing in music is highly effective. In this paper, I will report on my music class practices in the 2021 school year, focusing on the creative writing area.